

李 佩姍 (リ ペーション)

台湾出身 / 2004 年度奨学生

東京外国語大学 地域文化研究科日本専攻 修士課程修了

財団設立から 30 年以上が経ち、国際社会の変化と共に、留学生の留学動機や経済事情も大きく変化しています。今回は、14 年前の留学生活の意義が垣間見られる奨学生 OBOG のエッセイをご紹介します。



台湾の国立高専4年生ごろに、日本に留学した先輩たちのお話(国立大授業料無料!)を聞いて、同じくらいお金をかかるなら、台湾の大学に編入するより日本の国立大で基礎から学んだほうが良いと思い、19歳学生の自分が1年半バイト・学校奨学金(そのために成績上位に)をこつこつ貯めました。7月卒業し、10月に来日するまでの間も、バイトと日本語能力検定・統一試験(数・英・歴)に没頭しました。

10月の来日後、12月の試験まではバイトせずに食事を我慢して受験勉強に集中しました。日本語学校の先生に「来たばかりなので、試験に落ちても気にしないように」と言われながら、3か月で日本語能力検定1級及び統一試験で国立大入試申し込みに必要な点数が取れ、複数の国立大入試を受けて、その中から日本語学校の担任が強く勧めた東京外国語大学を選びました。

ずっとバイトをして、自分の家賃・生活費と大学授業料・教科書を払ってきました。大学4年生に文部科学省の奨学金、修士2年生に坂口財団の奨学金を頂き、かなり助かりました。その後、日本で結婚し子供に恵まれたので、博士後期に進学せず、5つぐらいの翻訳関連在宅バイト(子供の体調が不安定だったため会社勤務

を断念)をして家族を支えました。

夫が無事に大学の教員になり、引越しをするため、主に在宅の仕事をもつちながら、子供達に台湾の親友から貰った小学校国語教科書を教えたり、習い事に一緒に自転車で通ったりしています。昔からの質素な生活を変わずにしています。

次男が小学校に入学してから、次男と一緒に生活保護者の炊き出し活動、地域の子供食堂活動(長男が小学校5年生から子供食堂のボランティア活動参加)に参加しています。生活保護者や本物のホームレスと接して、子供達に「食事を頂ける、住む部屋がある」ことに対して神様に感謝することを伝えています。若い頃から周りに色々助けて頂いた自分が日本社会に少しながらの恩返しをさせて頂きたいと思えます。

少子化が進む今の時代、豊かに暮らしていることが良いか、不幸か、どちらでしょう？